

私が考える学生教育について

中 野 哲*

[要 旨] 医療は常に急速に進歩し、検査機器や試薬の開発や改良が進んでいる。臨床検査技師は医師の指示の下、検体の採取と検査の実施、それに伴う検査後の説明や相談まで検査すべての過程に責任を持つことが求められる。そのような中、臨床検査技師が存在感を発揮するには、正確な知識と技術をもち、他の医療従事者と連携することでチーム医療を推進、貢献していかなければならない。現場のニーズを把握し、単に検査結果を報告するだけでなく、付加価値を付けた報告を行えるような人材の育成が求められている。質の高い臨床検査技師を育成するのに必要なことは何か。卒前教育のゴールである国家試験合格以外にできることは、卒後に技師としてやっていく自信であったり、研究的思考力であったり、コミュニケーション能力、問題解決能力といったスキルを磨くことに他ならない。他の資格取得により自信をつけさせるにはどうすれば良いかを自分なりに述べるものである。

[キーワード] 臨床検査技師教育、卒前教育、資格

はじめに

現在、医療は常に急速に進歩し続けています。医療現場では検査機器や試薬の開発や改良が進んでおり、新たな治療法の発見も進み、医療従事者は自己研鑽を重ねて患者さんのために対応できるように努めていると思います。そのような状況のなか、医療従事者の一員である臨床検査技師の育成に携われることを喜びとしております。しかしながら臨床検査技師教育、とりわけ卒前教育を行う我々は医療現場に即した人材を輩出することが出来ているのだろうか、また学校法人新渡戸文化学園新渡戸文化短期大学(以下、本学とする)は短期大学でありますので、3年間という期間で教育を実践できているのだろうかということを改めて考える機会を頂くことが出来ました。まだ教育経験も浅く拙い私ですが思うところを綴らせて頂きます。

I. 臨床検査技師を目指すための

動機付け教育の必要性

まずは私が語りたいのは臨床検査技師を目指すための動機付け教育の必要性です。本学に入学してくる学生は、身内や知り合いが医療関係者であったり、高校の先生からの薦めであったり、また医療職を目指していろいろ調べていく中で臨床検査技師という職種を知り、免許取得を目指しています。ただ昨年(2016年)の日本臨床検査学教育学会学術大会(以下、学術大会とする)の教員研修会の諏訪部章先生のお話の中で、独自に行った一般人を対象とした医療職種に関するアンケート結果では臨床検査技師の認知度が25%前後であり、これには検体検査部門での仕事が検体分析や結果報告が主であり、ある一部の検査を除き、患者さんと接する機会が極めて少ないということが原因ではないかというものでした。認知度の低い医療職である

*新渡戸文化短期大学臨床検査学科 m_snakan@nitobebunka.ac.jp

臨床検査技師をいかに一般の人に知ってもらうかについては、一般社団法人日本臨床衛生検査技師会(以下、日臨技とする)が様々な広報活動を行うことで向上に努めておられると思います。ただ認知度が低いがうえにこの職種を調べるといっても臨床検査の全体像が浮かび上がって来ず、明確な意志の下で入学してきた学生以外は自分の考えていたものとのギャップに困惑し、進路決定においても「何故、臨床検査技師を目指したいのか?」という命題と向き合うこととなります。免許取得は当然、この資格を取って仕事をするという動機付け(モチベーション)ではありますが、免許取得のその先にある技師人生において臨床検査技師になってどのようなことがしたいのかを思い描く必要があります。そのためには「臨床検査を体感し、何年か後の自分をイメージする」ということを早い時期から行っておいの方が良いのではないのでしょうか。ある病院の就職試験を受けるために送る書類の中に、入学してから20年後の自分はどのようなかを何年かごとに書き込む書類を見たことがあります。これは自分の今後のイメージや具体的な目標やビジョンが持っているのかを採用側は知りたいのではないのでしょうか。このような点からも臨床検査技師を目指すための動機付け教育が必要だと考えております。

II. 卒前資格と卒後資格、 そして私の提案

さて臨床検査技師をはじめとする医療系の免許は生涯免許であり、更新制度はありません。しかし医療は日進月歩で常に最新の知識と技術を習得する必要があります。故に免許の取得後も研修会や学会等に参加したり、論文や文献からの情報を得たり、各分野の上級や認定資格取得など生涯にわたる教育が必要となります。つまり自己研鑽が必須なのです。ただその自己研鑽はほとんどが卒後のものとなっております。在学中に取得可能な資格・認定として本学では希望者のみですが、一般社団法人日本遺伝子分析科学同学院の遺伝子分析科学認定士(初級)や特定化学物質及び四アルキル鉛等作業主任者、一般社団法人日本不整脈心電

学会の心電図検定(3級)などを座学や実習、補講や講習会参加を通して検定合格を支援しています。心電図検定(3級)レベルは心電図の基礎的な判読力を有するもので、在学生には最適な検定であり、また特定化学物質及び四アルキル鉛等作業主任者は臨床検査の病理検査室において特定化学物質を使用するため、この資格を持った技師が必要となります。このような資格の取得を目指す背景には技術・知識の向上はもちろんですが、就職時にはこういった資格取得者は意欲があり、上昇志向があり前向きか否かを判断されるのではないかと思います。自分自身に自信がない、本音や本心を他人に知られたくないということで最近の若者の一部には本来の衛生上の理由とは異なる目的で常にマスクをする伊達マスクというものがあります。つまり自信がないということは、「これを成し遂げられたから大丈夫!」といった自信や達成感、成功体験が少ないことを意味しているのではないのでしょうか。そういった自信を学生の間に培って欲しいと切望しています。これは勉強に限ったことではないのですが、ただ臨床検査技師として働く上でその分野の内容で学生の内に自信を持っていれば卒後の展開も変わってくるのではないのでしょうか。過去に臨床検査学教育(以下、本誌)の学校紹介の投稿で私の母校である学校法人電波学園東京電子専門学校の紹介を読ませていただいたのですが、「上級および中級バイオ技術者認定試験をプレ国家試験として2年生全員が受験している」という記事を見かけました。このように、臨床検査に特化したプレ国家試験の意味合いの試験があれば学生はまずはそれを目標に勉強するのではないかと思うことがあります。このプレ国家試験のモデルケースに近いものとして、一般社団法人日本生体医工学会の第2種ME技術実力検定というものがあります。この検定試験は「ME機器・システムの安全管理を中心とした医用生体工学に関する知識をもち、適切な指導のもとで、それを実際に医療に応用しうる資質」を検定するもので筆記試験(午前60問、午後60問と400字以上600字未満の小論文)が行われます。この試験には医用生体工学を主として学んでいる臨床工学

士を目指す学生をはじめ、その他の医療従事者を目指す学生、実際に現場で働いている工学士以外の医療従事者、医療機器メーカー勤務など多岐にわたっています。合格率は過去10年の平均で32.4%ほどです。ただ受験者の多くは臨床工学士を目指す学生であり、国家試験の前のプレ国家試験の役割を果たしているように思われます。この資格を取得後、第1種ME技術実力検定に挑むこともできますし、国家試験合格でも第1種の検定試験の受験資格を満たします。臨床検査技師においても、学生の間にはこのような規模の大きい試験や資格を取って就職試験や国家試験に臨むということは1つの大きな自信につながるのでしょうか。筆記試験にするのか実技試験にするのかはさておき、卒後におそらく挑戦するであろう上級また認定試験の前のプレの役割を果たすような試験を日臨技または公益社団法人日本臨床検査同学院(以下、同学院とする)、一般社団法人臨床検査技師教育協議会(以下、協議会とする)等の団体で行えるような仕組みがあったら良いのではないかと個人的に思うことがあります。卒後の臨床検査技師教育といえば、日臨技の研修会・講習会をはじめ、同学院で行われている二級臨床検査士試験、一級臨床検査士試験、緊急臨床検査士試験などがあります。現在、緊急臨床検査士試験などは応募が多く受験には抽選が行われていると聞きます。卒後の認定試験だけでなく卒前教育の中に国家試験とは別に何か学生が取得して自信につながる大きな試験や資格があれば理想ではないでしょうか。ただ現実問題としてそこには各教育機関のそれぞれのカリキュラムの違いや難度の設定など乗り越える壁は多々あるとは思いますが。ただこの第2種ME技術実力検定を受ける学生は2~4年生と何度も挑戦していることもありますので、腕試し的な要素もあるのかもしれません。

III. 本学の取り組み

前述した資格取得を目指す一方では近年、臨地実習に参加する学生に必要とされる、判断力、技術力、そしてマナーや接遇など現場で必要とされる技能の習得を評価する方法として客観的臨床能

力試験: Objective Structured Clinical Examination (OSCE)を行う教育機関が増えており、学術大会でもその運営の難しさや問題点、その効果等の報告や情報交換が行われています。本学ではOSCEは実施していませんが、「新渡戸検定(臨床検査学科編)」という本学独自の各科目の専門性を高める目的の専門試験があります。歴史ある本学の建学の精神と教育目標を体得し、臨床検査学科が目指す、社会で活躍できる人材を見据え、病院実習を目前に控えた臨床検査学科第2学年の希望者に対して、生理機能検査学、病理検査学、微生物検査学、血液検査学の4教科において行っています。今はこういった学校独自の資格・認定試験を行うことで臨地実習への自信にしているかもしれませんが。また臨地実習においては病院マナー・接遇が大切です。本学では響きあいネットワーク東京SPの会と連携して「模擬患者(Simulated patient)との医療面接」なども臨地実習前に行っています。

IV. 最後 に

卒前教育のゴールは国家試験の合格だとは思いますが、国家試験は「臨床検査技師としての第一歩を踏み出すのに必要最低限の知識」を担保するものであり、あくまでスタートラインです。そのスタートラインに立った時に技師としてやっていく自信であったり、研究的思考(リサーチマインド)力であったり、コミュニケーション能力、問題解決能力といったスキルを磨く一端を担いたいと思っています。法律が改正され、検体採取や嗅覚・味覚検査といった検査を行う機会も増えてくるでしょう。これからの臨床検査技師は医師の指示の下に、検体の採取と検査の実施、それに伴う検査後の説明や相談まで検査すべての過程に責任を持つことが求められます。医療が高度化、専門化するなかで臨床検査技師が存在感を発揮していくには、正確な知識と技術をもち、他の医療従事者と連携することでチーム医療を推進、貢献していかなければなりません。ゆえに現場のニーズを把握し、単に検査結果を報告するだけでなく、付加価値を付けた報告を行えるような人材の育成も

必要でしょう。昨年の学術大会では学生向け RCPC (Reversed Clinical pathological conference) として松尾収二先生(天理医療大学)が、検査データ読み解く力は臨床検査のプロである臨床検査技師にとって必須の技能であるといわれていました。付加価値の情報を提供するためにもこのような試みや機会が増えれば本当に学生は喜ぶと思います。今、少子化の影響で学生数は減少傾向にあります。この職種の認知度ややりがいをもっと多くの人に知って貰いたい、そのために活躍する臨床検査技師の育成にその施設にあった方法を模索しています。そのメソッドの情報交換の場に協議会の学術大会があります。皆様と力を合わせて望まれる臨床検

査技師の育成に臨みたいと思います。

近年、本学の学生も公益社団法人東京都臨床検査技師会の学生会員になり、研修会にも参加しています。学生は出来るだけ吸収できるものは吸収したいと思っており、学びの場を求めています。これに可能な限り応えていきたいと思っています。もちろん、学生が自ら学ぼうとする意欲は大事ですが、教員は学生の能力を上手く引き出させるように補助してあげる存在にならなければいけないと考えています。検査データから疾患との関連性を考え、病態を総合的に把握できる知識と能力を備えた臨床検査技師の教育を目指し、学生とともに成長し学んでいきたいと思っています。